



TITLE:

<巻頭エッセイ> 「歴史に学ぶ」とは : Extramural から考える

AUTHOR(S):

渡邊, 洋子

CITATION:

渡邊, 洋子. <巻頭エッセイ> 「歴史に学ぶ」とは : Extramural から考える. 京都大学生涯教育フィールド研究 2014, 2: 1-2

ISSUE DATE:

2014-02-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/185593>

RIGHT:

【巻頭エッセイ】

「歴史に学ぶ」とは ; Extramural から考える

渡邊 洋子

What is meant by learning from history? ; on 'Extramural'

WATANABE, Yoko

最近、必要があつて Adrian Barlow, *Extramural ;Literature and Lifelong Learning, Lutterworth Press,2012* という本を読んでいる。

とても刺激的な本である。刺激的と言っても、壮大なスペクタクルが描かれているわけでも、ダイナミックな社会変動や革命的な社会運動が取り上げられているわけでもない。また、サブタイトルは「文学と生涯学習」であるが、文学を生涯学習としてどう普及させるかに関わる「すぐに役立つ」画期的なノウハウが展開されているわけではない。それでは、何が刺激的なのか。

‘extramural’ とは、「構外」という意味で、大学の「構内」の反対語である。イギリスの学問知は 19 世紀に至るまで、中産階級の子弟が通う「オックスブリッジ」に独占されていたと言っても過言ではない。大学教育はそれまで、「構内」で行われるのが自明であり、裕福な家庭でジェントルマン文化を享受しながら育った男子学生に、排他的・独占的に提供されるものであった。

1867 年、双壁の一つであるケンブリッジ大学の教授 James Stuart は、教師として人間としてより向上したいと願う熱心な女性教員たちに請われ、公開講義を行っている。彼はそれを起点に「構外」における大学教育の意義とニーズの存在に目を開かれることとなる。以後、同大学には構外教育研究 extramural studies の講座、さらに構外教育部門 extramural department が設けられ、労働者階級を中心に、多くの成人が高等教育レベルで学ぶ機会を得られるようになっていく。「大学拡張運動」の本格的な始動である¹。

同大では現在も当時と同じ建物 MadingleyHall を拠点に、成人の学ぶコースが数多く提供されている。Madingley Hall とは、建物の名称と同時に、ケンブリッジ大学生涯継続教育研究所 Institute of Counting Education の通称である。

¹ これらの経緯については、マイケル・スティーヴンス『イギリス成人教育の展開』（渡邊洋子訳）、明石書店、2000 年

2012年12月のある日、私はインタビュー相手に会うために同Hallの玄関に佇みながら、大学拡張講義で学んだ受講者たちに思いを馳せていた。また、同Hall内のカフェに腰を下ろしながら、近代イギリス成人教育史を代表するとも言えるこの歴史的建造物が現在、幾多の年月を経ても、大学のメインの建物の一つとして、しかも当初と同じ「成人の学習支援」という機能を維持・発展させながら、あたり前に存在し続けていることに、新鮮な驚きと大きな感銘を禁じ得なかった。Stuartの頃と全く同じように、学ぶことによって生きる力を培い、働く喜びを得る人たちが、今でもここで、真摯に学んでいるのである。

同書はICEの前ディレクターBarlow博士が、自らが専門とする「英文学」の領域を足場に、Steuart以後の'extramural'の発展経緯を跡づけたものである。そこには、博士自身が担当した英文学のコースで、受講生たちが文学を学びつつ、文学から何をどう学んでいったのか、また、博士と受講者がともに、少数人数クラスの双方向のやり取りを繰り返す中で、どんな学びの空間を生成していったのかが、生き活きと回想されている。その臨場感あふれる叙述の中で、改めて、「人が人として学ぶこと」の意味をじっくりと考えさせられる。

イギリスでは、大学の知を社会人（労働者階級）に開くにあたり、オックスフォード・ケンブリッジで学部生の指導法として定評の高かった「テュートリアル・システム」を生育暦や文化のまったく異なる成人学生の学習に適用すべく、成人のための「テュートリアル・クラス」²が考案された。非職業的教養教育 non-vocational liberal education を最大の特色とするイギリス「成人教育」実践のエッセンスが19世紀以降、まさに21世紀の今も、英文学を通して脈々と、成人学生たちに共有されているのである。

サッチャー改革以後、職業教育・訓練が重視され、ブレア政権期には、生涯学習政策の中核になっていった。この変遷の中で、成人教育 adult education という言葉はイギリス社会では「死語」になってしまった。だが、同書が描き出す世界は、「歴史」として書かれてきた成人教育史と、サッチャー改革以降、「非効率性」と「非生産性」を理由に軽視されてきた「成人教育的価値」とが、まさに、現代社会を生きるBarlow博士の手によって、「テュートリアル・クラス」を引き継ぐアットホームで相互的な学び空間として、目の前に集約的に示されたものなのである。この大きな歴史の流れと向かい合う読者はすでに、時空を超えて、この学びの仲間の一員となっているのである。

² 「イギリス成人教育の方法論的成立に関する史的考察—初期テュートリアル・クラスの生成過程に注目して—」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第52号、2006、1～26頁。